SHINTANI Hitomi

新谷 仁美

富山大学 学術研究部 芸術文化学系 特命助教

伝説・絶滅・現生物問わず、人とのかかわりの深いいきものから着想を得た乾漆箱の制作を主な生業としてやってきました。作家名はひらがなで、しんたにひとみと申します。同郷広島のよしだたくろう氏にあやかってひらがな名にしました。などと説明していますが、他にもっと理由があったりもします。（長くなるのでここでは割愛させていただきます。）

制作の題目は、いきものと人との関わりの中で生まれる文化を下敷きとしています。なかでも虫と人の大きな物語のなかに身を浸すように制作し、その末端に自身の漆芸があるのだと信じて疑いません。
漆芸の専門分野は、乾漆、螺鈿、平文です。

略歴

広島生まれ
2010 年　富山大学芸術文化学部卒業
2012 年　富山大学教育学研究科修士課程修了
2012 年　重要無形文化財「螺鈿」保持者
　　北村昭斎氏に弟子入り
2014 年　独立　漆芸制作、漆工品修理に携わる
2020 年　富山大学学術研究部芸術文化学系特任助教

日本工芸会正会員

受賞

2013 年　日本伝統工芸近畿展
　　奈良県教育委員会教育長賞
2014 年　日本伝統工芸近畿展　日本経済新聞社賞
2015 年　日本伝統漆芸展　日本伝統漆芸展新人賞
2018 年　第 65 回日本伝統工芸展　高松宮記念賞
　　乾漆螺鈿天牛箱
2019 年　日本伝統工芸近畿展　奈良県知事賞
2021 年　第 68 回日本伝統工芸展　朝日新聞社賞
　　乾漆螺鈿平文はちす箱

(2012) / Photo by 新谷仁美

１．乾漆象虫飾箱（かんしつぞうむしかざりはこ）

箱の胸や翅、腹部分など主要な部分は油粘土で原型を作成、石膏型を作成し麻布をのり漆で張り重ねた乾漆技法で素地を制作しました。頭や脚など細い部品はヒノキ材を芯とした木芯乾漆や、鋼鉄線を芯とした金属芯の乾漆を素地としました。表面の塗装は、絞漆と金箔を使って虫食い塗りとした上に虫を漆で描き銀粉を蒔いた後に透漆を何層も塗り重ね変形白檀塗りとして蝋色仕上げにしたことで奥行きのある表現となっています。

老若男女問わず日本に生まれたからには必ず通ることになるであろう最も有名な昆虫文学であるところのファーブル昆虫記。私も例に漏れず小学生の頃とり憑かれたように読み漁り、立派な昆虫少女として広島のデルタ地帯の虫たちを恐怖に陥れていました。

そのような幼少時代を過ごしたため、大学の卒業制作のモチーフに昆虫を選ぶことはごく自然の成り行きでした。当時、空前のムシキングブーム（カブトムシやクワガタムシをコレクションし対戦させるゲーム）でした。カブトムシやクワガタムシといった所謂カッコ良い虫が礼賛される世の中へのアンチテーゼとして、無脊椎動物の中で最も種類が多く繁栄している（＝真のムシキング）にもかかわらず、一般的な生活の中でほとんど馴染みのないゾウムシをモチーフとして選び、乾漆箱を制作しました。

大学を修了し奈良へ移り修行の日々の中、毎週のように古社寺を巡れることにうっとりとしていたところ、改めてあたりを見回すとどうやら昆虫表現ブームの真っただ中にいるらしいということに気づきました。私の世代（俗にゆとりと呼ばれる）に前後して工芸素材・技法を用いて昆虫を題材とする人間が明らかに目立ってきています。原因は都市と自然がどうのとかそれらしいことを挙げてみることも出来ますが、あと 50 年後くらいしてからしっかり俯瞰してこの時代を振り返ることできちんと纏まった結論を出せると思いますので少々お待ちください。

日本美術史第何期目かの虫ブーム。ここでふと疑問がよぎりました。なぜ人は虫を描くのかと。卒業制作では単純に昆虫の形の面白さを漆で表現することに苦心していましたが、なぜ人はこの小さな無脊椎動物たちにここまで惹かれるのかを形にしたいと思うようになりました。

(2017) / Photo by 第 64 回日本伝統工芸展図録

2. 乾漆銀平文天導虫箱（かんしつぎんひょうもんてんとうむしはこ）

銀平文＝0.3㎜厚の銀の板を糸鋸で文様に切り抜いたものをテントウムシの鞘翅を模した乾漆素地へ貼り付け漆を塗り重ね研ぎ出し磨いたのちに銀の表面に鏨で毛彫りを加えた箱です。箱内部の懸籠には螺鈿で天牛（カミキリムシ）と蚕を配置し彦星と織姫を暗喩し、天道虫は天の川（Milky Way）の化身となり彼らを導きサンバを踊りながら二人を祝福する。偶然にもテントウムシのドット模様は星と呼ばれ（例：ナナホシテントウ）、銀平文の星文様は笹を表すことで七夕を虫に置き換え遊んだ箱です。

が、まったく誰にもその意図が汲めない箱になってしまいました。当時、みうらじゅん氏の言うところのマイブームとして東洋天文学にはまっていたのが大きな原因でした。ただでさえ、現代人の大多数は古い文物を見ても説明なしには鑑賞できない体になってしまっている（現代美術でも同じことが言えますが）ところに独りよがりなことをしていてもいかがなものかと反省しきりでした。

(2018) / Photo by 第 65 回日本伝統工芸展図録より

3. 乾漆螺鈿天牛箱（かんしつらでんかみきりむしむしはこ）

厚貝（1㎜厚）の白蝶・黒蝶貝を紫檀木画槽琵琶を参考にした正倉院文様風に切り抜いたものをカミキリムシの鞘翅を模した乾漆素地に象嵌し、塗りを入れ蝋色磨き仕上げとしました。曲面に配したことで反射でギラギラと主張が激しくなりがちな螺鈿表面には密な毛彫りを施し、柔らかな雰囲気になったと自画自賛しています。曲面に厚貝螺鈿を配置するのに異なる種類の貝を使用して文様をパーツで細かく切り抜くという手法が意外と誰もやっていなかったことに気づいた記念すべき制作となりました。

モチーフに選んだ虫はゴマダラカミキリというカミキリムシです。私が昆虫少女として暴れまわった 90 年代の広島のデルタではプラタナスの街路樹という街路樹にこの虫が繁殖していて、友人たちと捕っては集め、教室をカミキリムシだらけにしたものでした。このカミキリムシですが何故こんなにいたのかというと、典型的な都市化に適応した生物だったからです。近年、都会のビル群に本来海辺の崖で繁殖するイソヒヨドリが進出しているように特定の条件に偏った環境に適応し特定の生物が増えるとういことはたびたび報告されています。なにも都市化というのは現代に限ったことでなく、天平時代の平城京も人の手により計画的に整備された都市だったため、植物相が偏っていたはずです。すると食性の広いゴマダラカミキリはきっと平城京を飛んでいたと考えられ、ここで天平と現代が一匹のカミキリムシで繋がることが出来ました。

現代、この時代の特異性のひとつに過去の時代の文物のことを容易に知ることが出来るというものがあると考えています。せっかくそんな素敵な時代に生まれてくることが出来たのでこれからも過去と未来を漆と虫を通して繋げていこうと思っています。